

助詞は曲者

桑原 正紀

日本語でいちばん難しいのは助詞の使い方かもしれない。日本語を学んでいる外国人もそれがかなり苦労しているようです。歌人は日本語の語法やニュアンスについて人一倍敏感な感性を持っているといっているでしょうが、それでもこの助詞を巡っていつも悩まされます。自分の歌を作るときもそうなので、人の歌を読むときはなおさらです。「が」「は」「の」「を」などの使い分けや省略の可否、あるいは同じ助詞でも微妙な使い分けをするケースなど、一首一首検討が欠かせません。

子どもがはしゃぎてカードゲームする仲良きさまを
リビングに見る

この歌の中に助詞は、「が」「を」「に」と三つありますが、最後の「に」に問題があります。この「に」は場所を表す働きをしています。が、「子ども」がいる場所なのか作者がいる場所なのか不明確です。もし作者なら「より」という助詞を選択すれば確定します。「子ども」な

ら初句を「リビングで」として作り替えればよいでしょう。マロニエの並木の下にこもればの揺るるが中を自転車に行く

せつかくの気持ちのいい歌なのですが、やはり結句の読みでつまづいてしまいます。「自転車に（乗って）行く」と思われますが、「自転車に（向かって）行く」という意味もちらつくからです。ここは「自転車で」と言うべきところでしょう。「で」という助詞は中世以降のものだし音感がよくないという人もいますが、そういう人はきちんとした古格の「にて」を使うべきなのです。

助詞の数は現代語で四十ぐらいあって、古語を含めると六十以上になるようです。日本語を母語とする者は、生育過程でその一つ一つを感覚的に習得していくとはいえ、それを完璧にマスターするのはさすがに無理です。私などは少しでも迷うとすぐに辞書を引いています。さきほどの「に」など、『広辞苑』では七十七行、二〇〇〇文字近くを費やして説明しています。これはもうその都度調べて確認するしかないでしょう。

助詞は侮つてはならない曲者で扱いつらいですが、使いこなしたときの快感や、そういう作品に触れたときの心地よさは格別なものがあります。

夜の帳あつにささめき尽きし星の今げを下界かの人の鬢かみのほつれよ